

パツシオネ

七 状態犯罪人氣質

復員した重富はヒラノ医院に再復職。47年暮れごろ近くにあつて利用に便利だった、食事や酒を商う小さな店によく夕食や飲みに出かけてその従業員とは口を気安くきく仲になつていた。その店の表の方の係りの女二人のうちで過去に男関係で苦労したことがあつたらしい、人の好い一歳年上の大して美しくもないトシ子といつの間にか、男女として好きでもないのにもつれ合うような気持ちを抱きながら仲良くなつた。彼女は重富が初めのころから気に入つていたらしくキツチンにいても重富が入つて来ると、すぐに店側に愛想のよい顔で姿を現すのであつた。そしていつの間にか同棲するまでになつたが、重富は結婚という言葉をつまでもはつきりと口にしない。トシ子もなぜかそのことを普通の女のように重要視してないらしく、二人はただだと入籍せずに入籍関係をづける形で同

伊作 走

棲してゐた。彼は知人の遠慮がちな問にたいして正式結婚したと虚言を言つてゐた。48年秋、何食わない態度をつづけながら、新しい男を作つていたらしい内妻のトシ子はある日突然行方不明になつた。

一年弱の同棲の間にトシ子は、十数年前の数年間中国で機銃や銃剣で多数の中国人を殺戮した過去を持つたがために、重富という人物の内側に本人も自覚してゐない心の深い闇の部分で女の鋭い勘で窺ひ知り、彼が疎ましくなつたかもしれない。50年十二月、重富は精神状態に発作的揺らぎが起きて突然現在の医院の事務職の仕事が、確とした理由がないのに妙に気に入らなくなつて職場が厭になつてしまつた。そして親しかった元戦友が東京で事業をはじめて忙しくなつたから手伝つて欲しいと言う誘いの相談を受けたという、嘘話を作り上げて医院を年末に退職した。翌年晩春、堺市内の食品会社に入社したがデスクワークのつもりが、製造現場に回されたのが気に入らずに、同年暮れ実家の自転車屋を継ぐためとの作り話の理由を言つて

退職。51年夏、新聞広告をみて、大阪市内鶴橋の鉄工所に職を得る、この際には中国戦線に妻子を残し出征従軍して、南京、漢口などでたいそうな危険と苦勞した思ひ出を持つ、元上等兵の経営者とは、面接時と同じ中支で戦闘経験を持つ人間同士ということで、当時兵隊のなかでは有名だった、武漢攻略戦での飯塚大佐戦死の状況などが、お互いの共通の話題となつてすぐに話が合った。面接時意気投合して親しくなつた理由もあり、またこのK鉄工所のように小さな会社には、五年制商業学校卒で三十歳代前半の男子の希望者は少ないため、直ちに事務員として採用された。そして早速に与えられた仕事は大型のボイラー・タービン据え付け工事であつた。二十人規模の作業者の約二か月間の出張工事班の現場事務処理担当ということに決められたのであつた。工事の技術責任者はたき上げだが気の利かない頭の固い古い社員が工事グループをまとめていた。その後何度かの出張事務を担当していたが、一度だけ出張工事要員の不良社員であつた同僚と共謀して、消耗品の溶接棒、機械油、パッキンなど細かい雑多な消耗品ばかりの現金払いの領収書を、少額で何枚も購入先の店名を同じくしないように、事務的なことには万事に目を通すことの不得手な技術責任者のあ

ずかり知らないうちに捏造した。この小悪事は会社に出露見されるはずはないと読んだのだが、これまでの出張工事実績とは大層異なる数量だつたことと、工事責任者が重富たちが偽伝票で会社に請求したのを知らず、ひと騒動があつて、架空支払で小使銭を稼ごうとしたのが発覚しそうになつて結局実現しなかつた。それを機会に52年秋、K鉄工所退職。この失敗は大陸での歴戦の経験のなかで学んだ、細かい点まで用心をして、おのれを守つて来ていたはずの重富らしくない単純で下手な行為をしてしまつた理由は、共謀した相手が出張仕事には経験を積んではいるが、品性の貧しい単純な男で、重富の意見をろくろく聞かずに突出してしまつたからであつた。重富は医院の事務には慣れてはいたが、元もとが商業学校卒のため、機械とか装置については無知同然であつたし、軍隊でも工兵でなかつたから、大型装置の据え付け基礎工事、連絡配管工事などはボルト、ナットを始めとした一から十までが分からず事務処理に戸惑う場面が多くて、誤りなく事務を行うには、部品、消耗品の名称に始まつて使用方法などの知識を短時間に得るには、共謀した男の力を大いに借りなければならなかつたから、彼には頭が上がらなく、事務担当者としてむしろ被害者の立場にあつた

というべきだったろう。

このころ私生活は荒れ模様だった。身辺には常に複数の水商売の女性の影があった。同年ヒロノ医院には友人との共同事業頓挫を理由に、居心地の良い場所に再々復職。重富が医院に繰り返し復職できた理由は、彼が二度に涉った軍隊生活中に磨きかけた、組織の弱点、つまり表には出せない何かを嗅ぎ取り、相手方に何ほどのことを知っているふりを装い相手方に無言の脅威を感じさせる、悪才に長けた能力が寄与しているということも多少はあったろうか。さらに彼は通院、入院患者たちへの応対が巧妙で、苦情などを丸く収めてしまう仕方を心得ていた。そして出入りの業者に対しては医院側に有利な取引をする力量を持っていた。加えて商業学校を低空飛行で卒業した程度の人間だったが、常に生死にかかわる戦地に数年いて頭の回転がすばしこくなっていたこともある。

56年三十七歳、事務員三人の事務長になる。48年以降独身をつづけている。この年徳島市から出てきて大阪市内の叔母さん方に同居している栄養専門学校卒十九歳の土井よしこが医院に就職。このとき恥ずかし気な風情で挨拶をした、よしこに重富は奇妙なぐらいいこの若い純情な女に気持ち惹かれた。このときに

女には不幸な接点が生まれたのであった。彼女には二年半後に、生きる道が悪路に変わるのだとは思ってもいないアクシデントが起こった。重富の私生活の中で接している女性たちとは、よしこはあまりに違っていた。一昔前には普通であった日本女性のしとやかさをそのまま体に纏っていた。若さからくる艶のある小顔、きれいな眼に特徴があった。彼女が二年前にこの医院に入ったのは、すぐにも次に移るための繋ぎだったのではないかと重富は感じていた。ここでしばらく働く中にこのごろ大阪市内に建ちだした、近代的ホテル、病院に栄養士として就職するための炊事関係の知識と現実の作業環境に慣れるのを目的としているように思えた。よしこが英語学校に週二回通っているということも、重富の耳に入っていて彼女がここを一時の勤め先として選んだのだと信じた。院長は少し変わったところのある男ではあるが、大阪に代々住む隠れた有力な家系の人間だったから、大阪市内では思わぬところに実業家の知人がいると聞いていた。この院長に氣にいられば、新しいホテル、大病院に入社するツテが生まれる可能性が、よしこの視野に入っているのかも知れないと彼は推量していた。

重富は大して惚れているわけでもないのにひとりの女に執着することがある。十年前に内妻にしていたトシ子は同棲の初めのころはたいそう色気があって神経質でなく、万事悠長なところが、彼の戦地帰りのささくれた神経を安静化してくれるところに引かれたのだった。現在同じ医院で働いているよしこにたいしても、彼女の可愛らしいところが中年男の憧憬と劣情を毎日そそのかす状況を作っていた。そして以前トシ子に執着したような状態とは異なつて、よしこへの原始的な男の欲望が、内面に燦る形になつた活発な愛情が生まれていたのであつた。重富がこれまで生きて来た世界は、ものの表面だけを見ることで良しとするために、ほとんどが酷薄な状態であつた。人生のおもむきを厚くする深い思慮のかたちがおよそ見えなかつた。水溜まりの水を見て、水の本質を知つたつもりになるのが常態である環境に馴染んでいた。よしこの何処が気に入つたとか、魅かれるという具体性のある理由を、彼は判然とは言えなかつたが、彼女の全体的な佇まいが見せる、生来備わつた無自覚なチャーミングな雰囲気になつてあつた。彼が復員後の十四年間胸のうちに閉ざしていたところの身持ちの固いと言われる女にたいする憧憬は、普通の家庭に育ち、正常な成人に達している娘た

ちの無垢で生き生きした姿であつた。二年前によしこが来てから思慕の感情が微かに芽生え彼女の横顔に魅入るときがあつた。見つめているうちに彼女を偶像化しそんな思いが湧くのであつた。その恋愛的感情は昂ぶる非倫理的な欲情と併存していた。特によしこが笑顔になるときは言葉には表現できないほどに、かわいらしく、かつ色気が溢れていたために、男の心を驚づかみする迫力が浮き出る感じがあつた。よしこの間によこたわる十七歳違いという大きい年齢差は、当然のこと男の側に節度が生まれるものだが、重富の内側には年甲斐もなくその節度を越えて、自らには抗いがたい情動が燃え上がり始めていた。時々機嫌よく笑っているよしこは、男から見れば受動的な女性の天性の存在を秘めやかに示していた。それは男が働きかけると無心に待つていたように反応しないでもない優しさかほの見える気配が重富に感じられた。重富は中国大陸では侵略軍の兵士としての暴力と幾ばくかの金銭でかの地の女を蹂躪した物のように買うという、うそ寒い素行の悪い青年兵士の心情を持つてに過ぎない日常だつたからいまの平和な社会のなかでは、二年前によしこの姿に魅入られた自分がうら若い素人の娘を好きになつても、若い女の心も身体も平穩理に自

分の方に何とか引き付ける術はかいもく分からなかった。重富の女性にたいする感覚は普通人としてのパランスを欠いたために女の肉体だけに行動力を振るつた短兵急なことになったのであった。それは遙かに遠い戦場での兵士時代の過去に芽生えていた非倫理的で酷薄な魂の再来だった。中年になつていた重富には、今夜、ごく少量のアルコールで頬を染めているよしこが無意識に醸している魅惑的な空気を、他の男たちは看過しても、彼にはあたかも自分の心音が聞こえるようにしてさどく感じていたのだった。久々にたぎり立つた野蛮な情欲がよしこを襲う動機になり、彼の背中を強く押したのであった。重富は今夜、状態犯罪人としての心理に大きく傾いていたのであった。

ヒラノ医院では毎年の十二月三十日には、午前中は一年間で乱れた書類と業務に使われたさまざまな物などの整理と廃棄に各人別に時間を費やした。午後は大掃除と院内の片づけ作業を全員で行うのが恒例になつていた。よしこは栄養士だったので入院者の食事に関係することが仕事であつたから、事務員で年齢の近いさっちゃん和二人で組みになつて炊事場を中心に働いた。男性たちは午前中から廊下、病室、診療室、検査

室、事務所などを担当した。女性たちは炊事場、玄関、食堂などを掃除することになった。トイレは外部からの専門の女性が午前中に清掃をすましていた。よしこは準備して来たズボンを穿いており高いところにも、脚立に乗り壁面の油污れを洗剤で落とすような積極的な活躍をしていた。作業始めに取り掛かつた炊事場の窓ガラスは磨き上げられ午後の外光がよく透過して、内部の設備類が輝いていた。よしこに関心がある重富はときどき顔をのぞかせに来ていた。覗きに来るたびに骨身を惜しまずに働くよしこへの好印象を募らせ、欲情が重富の感情を左右していたことも併せてこの娘を自分の思い通りしたい欲望は強まつて行つた。よしこもさっちゃんもこまめに身体を動かして、夕方まで手を休めようとはしなかつた。彼女たち二人の担当範囲の清掃とかたづけ作業が終わつたときは、日が暮れてからかなりの時間が経つていた。よしことさっちゃん和の二人ともとても疲れていた。作業がすべて終了してから医院の食堂で、大掃除に参加した全員の夕食会が行われた。院長は前日の夕方から三日間雲仙へゴルフ旅行に出かけて留守。他に二入いる医師の独身の方はそのころ国際的には有名になり出していたが、日本人の間ではまだあまり知られてない観光地ブーケット

島に出かけていた。その他の看護師たちは不在だった。雑用係兼警備員として医院の奥まった裏側の六畳間に住み込んでいる笛田夫婦は参加していなかった。食堂に集まっていたのは四十代の準看護師二人と従業員の十人ほどで、医院が経費を負担する夕食会は、例年事務長重富の計らいで、仕出し屋から届けられたおつきり、吸い物、エビとアナゴの天ぷら、鯛の兜煮、卵焼き、蒲鉾などがテーブルに並んだ。酒とビール、ジュースもかなりの量が用意してあった。重富が簡単に大掃除の苦勞をねぎらう言葉を述べてから乾杯の音頭をとると、うずうずして湧く唾を飲み込みながら待っていた人たちは、すぐに箸を取って食べる者、ビールのコップを隣同士で軽くかち合わせて一息に飲み干す者もいた。お喋りと笑い声に包まれる中、よしこは職場で知り合いになり気が合う。この近くの高校卒で両親が院長と知り合いであつて、自宅が近いという理由でヒラノ医院に二年前のよしこ後先に就職したさつちやんと隣同士に座り、二人とも男性の目を気に掛けて控えめの態度で食べ、ジュースを飲んでいたその間にも、いくら断つても、周囲の少し年長の男性たちからビールや冷酒を熱心に勧められた。掃除と炊事係りのおばさんらも日ごろには、見せない気分の高揚ぶりで、

大声になつて仲間と話しする打ち解けた姿になつていた。男たちから無理じいに差し出される少しばかりのアルコール類を拒否できずに、困りながらもさつちやんと、「用心せなこわいで、あんまり呑んだらあかんて」と言葉を交わしながら、よしこもさつちやんもちびちびと咽喉に流し込んでいた。近い席の二人の男性には、今夜は特によしこを酔いつぶす企図でもあるのか、押しつよく、付きまとわれてビールを飲まされそうで、逃げ出したくなつて最中、重富はジュースの瓶とコップを手にもつて寄つて来た、

「君ら、女の子にビールを勧めるのはそこまでおいときや。アルコールでうて甘いもん、彼女らに飲んでもろうたらどないや。二人とも遠慮せんで蒲鉾やてんぷらを食べてや、食べてる？そうか、せやったらええけど、ご飯も欲しいんちゃうか、出てないからおなか寂しいやろ」

と言いながらジュース瓶とコップを二人の娘の顔の前に置いた。よしこは事務長の示した心づかいに救われたと思つた。さつちやんも同じ気持ちのようだった。よしこの安堵した表情の上に、感謝の笑みを微かにかさねて彼の目を見たが、声を出してまで嬉しい気持ちを感じずかしさがあつて表すことはなかった。このとき、

日ごろは気ごころが分からない事務長だが、優しい人なんだと思つた。それから誰にも気づかれぬように重富の動き、言葉などに好意的な関心を持ちはじめた。よしこは十数年前の重富が中国戦線で行つた過去の非情な行状を、誰からも聞いてないために何一つ知らない。医院内でかなり遣り手の中年男として管理事務を執つてゐる姿が、彼女の重富という人物を知つてゐるすべてであつた。

いつの間にか時間が経ち、さつちやんとちびちびと口に含んでいたアルコール飲料によつて、よしこは初めて経験する微酔状態で頭がぼんやりとなつていた。少しでも気が緩むと、椅子にきちんと坐つておれずに姿勢が崩れそうになる。そうなるのが恥ずかしいから、表面上は楚々とした外見を維持するのに、ずいぶんと気を張つてゐた。壁の電気時計が九時を指している。二時間半ぐらい食べたか飲んだりお喋りをしてゐたのだ。同席の男たちは酔いが回るとともに声が大きくなつた。若い彼女たちに対して露骨に興味あり気な態度に変わり出した者も現われたので、よしこはいささか落ち着かない心地になつてゐた。ほろ酔いになつてゐる人たちと一緒にゐるのが苦痛になつてゐたときによりやく夕食会はお開きになつた。アルコールのかなり

の量が入つた重富はよしこに向かつて情欲が募つてゐた。それを抑えている中での時間が、だらだらと経つてゐた。夕食会の席には九州から昨年大阪に来た、事務係りの帖佐という夜間大学に通つてゐる二十五歳の九州人らしく肌色が少し濃く、目が澄んでキラキラした青年が、初めのうちは席の端の方でおかずだけを食べ、ビールはすこし飲み、酒は飲まずにおとなしくしてゐて、よしこたちに近寄つて酒などを強要することはなかつた。帖佐は夜間学生同士の忘年会に出るからと言つて、夕食会に出た食べ物と酒がまだ卓上にならずに残つてゐるころ、一足早くに姿を消した。帖佐は食堂を去る前に、よしこたちのかたわらに来て、

「まだ帰らんとね？」

と腰を屈め頭を低くしながら小声で聞いた、帖佐はよしこのそばに来たので少し上気して、大阪に来て以来口に出さないようにしてゐた、九州言葉がつい出てしまつた。すぐそのことを彼は悔いた、この地の言葉をまだよく使えないから標準語を使おうと心がけてゐたからだつた。だが今夜は酒が出た夕食会だからあまり固く考えることはあるまいと、自分でなつとくして自然体でしゃべることにした。

「うん、うちらは帰りたいんやけど、後片付けをせな

あかんねん」

とさつちやんが答えた。よしこは内心（帖佐さんがわざわざそばに来て、わたしの眼を見ながら声かけはるんやから、わたしに関心もってはるんや、絶対そうや。帖佐さんて優しい人やってんやわ、そういう感じを今まで見せへんかったけど、この人は大阪育ちの若い人とはどっか違うわ、九州の人らしく飾らない感じやし、九州の何処の育ちなんやろ」と胸の奥で呟やいた。帖佐青年が医院を出る前に傍にきてくれて声をかけた行動がとつても嬉しかった。一緒にここを出られへんのが、残念ですという気持ちを含めながら周囲に気を配る表情になってよしこも小声で、

「帖佐さんはいまからどっかに行きはるのん？」

「そういうこと、あと一か所、忘年会にでらなならんとたい。あんたたち、会が終わってから後片付けするの、早く帰えれば、途中まで送って上げようと考えとつたとやけど、そんなことならぼくはお先に失礼するばい、外は暗うなつとうけん気をばっけんとね」

よしこはもつと帖佐と言葉を交わしたくて

「後片付けしてたらバスがのうなるかも知れへんのやけんぞ」

ちよつと彼に同情を求めるような感じで言った、よ

しこは聞きなれない帖佐の九州言葉が珍しくまた耳に楽しかった。

さつちやんが横から

「そうなたら、ここに泊まらして貰うたらええがな」とごく軽くよしこの気がかりな点の解決方法を言った。このときには、一人で泊まるのは寂しいだろうかと、さつちやんは「うちのことを家は近いけど、あんたが寂しいやろうから一緒に泊まってあげる」と言うてくれるものと思いこんでいたから当然のように、「さつちやんも付き合うてくれるのやろ？」

と軽くさつちやんに同意を求めた、

「それがあかんねん、うち、年の暮れには帰るとようけせんならんことが、あるんやさかい」

帖佐はいまの彼女たちの話からよしこが利用するバスは失くなって、彼女一人で医院の空き部屋に泊まることになるのだろうと推測をしながら、この場を離れた。帖佐はよしこが一人で医院に泊まるという話になんだかよくないことが起こりそうで不安な気分が多少生まれていた。

夕食会が終わった時刻の屋外は、年の暮れらしく、早々と人影は消え、一年の間には静かになることはな

かった雑踏の街と、忙し気な人たちの往来した道路は静かな姿になろうとしていた。寒々とした星空の下、人影がなくなると街の通りを吹き抜ける歳末の寒風は一段と埃りつぽくなつて生駒山の方角へ向つて途絶えることなく走りつづけている。つい先ほどまで大人の男女が、年末の買い物に出ていて、医院の周囲の道路ではざわざわと多数の人間が動き回り、途切れなく人の声が交叉して雑音が立ち上がっていたのだ。街の賑わいを作っていた人びとの声と足音は、いつの間にかほとんど聞こえなくなつた。人の通りがにわかになくなつていく。近くにある小さな店が連なつて細い通り道を作つていた市場入り口の脇で、昼過ぎから行われていた、歳末恒例の救世軍の募金の太鼓の音もいまは聞こえなくなつていた。道に面する家々は早くも寝静まつているのではないだろうかと思ふほど、多くの家の二階の明かりが消えて、一階の部屋だけが黄色い電灯が点いて温かい雰囲気を作り、年の暮れの夕食を家族揃つて撰つているところを想像させた。その光景は故郷を後にして大阪に出て来たよしこを感傷的にしていた。そしてよしこが仕事で遅くなる折に利用していた、電車の駅までのバスの九時五十分の最終便は出てしまひもうなさそうだった。電車の駅までの足が失

くなれば、寒いなか人通りほとんどなくなつた夜道を一人で歩くのはとても怖くいやだつたから、医院に泊まるほかはないだろうから許可を貰おうと考えていた。仲の良い同僚のさつちゃんと一緒に泊まつてくれるだろうとの期待は、さつちゃんの話でそれができないとよしこに分かりがっかりしていた。会食後のかたづけは炊事係りの中年の女性の一人とさつちゃん、よしこの三人がしなければならぬ余計な負担がかかつたのが、終バスに乗れなくなつた原因だつた。後片付けがすべて終わるころよしこは壁の時計を見て

「もうこんな時間になつてしもたんや、終バスはまだあるやろうか、なかつたらいなれへんようになるわ」
「よつちゃん、バス、もうないんやろう？ちやうか」
「時計見たらそうなつてんねん、途中で抜けたらよかつたんやけど、言い出せなんだし、さつちゃんは家が近こつてええなあ、おうちではお母さん、あんたの帰りをいつも待つてはるんやろ」

「そーやけど、ええのんは近いちゆうことだけなんや、年越しの仕事がぜんーぶ、うちに回つてくるんやで、ようさん。うちがせなあかん仕事がつつてあるねん。せやから今晚あんたに付き合ふことが出けへんやつたんや。明日は今日とおんなじぐらい、しんどい一日に

なるんは、よう分かかってんねん、毎年のこつちや、大晦日やからしようないけど」

「そうやねんなあ、女は遊んでる暇ないもんなあ。えらい遅うなつたさかい、うちが乗る電車の駅に行く、終バスがさつき行つてもたはずやし、駅までの暗い道を歩くの、こわいし、どないしようかしら」

「さつき、言つたようにやつぱりここに泊まりいーな。患者さん、誰もいてはらへんよつて、部屋はぜんぶ空いてんのやで。本当はうちに来てもらうて泊まらしてあげたいんやけど、家が狭もうて、それに余分な布団もあらへんし風邪を引くかもしれへんよつて。よつちやんが来はつても気がねさせてしまうやろうから」

「うちはここに泊まれるんやったら、その方がええんや、そやけどかつてにそんなこと、でけへんのん、ちやうか」

「そらー、事務長さんにお願いせなあかんわ、すぐOKと言うと思うで、遠慮せんで言うてみたら」

「事務長さんて、あの人ちよつと怖いわ。いつも黙つてはるよつてに」

「ええ人やと思うんやけど。うちなんか二年のあいだ、一ぺんも怒られたことないんやし、ほかの人も文句言われてるとこ、見たことあらへんけん」

「困つてもたわー、一人で泊まるんて心細いやん」

「今夜でのうたら、うちも付き合えるんやけど、どないしても帰らなあかんねん、かんにんしてな、うちも一緒に頼んであげるで」

よしこが重富に一泊を願ひ出た顔には羞恥心がみずみずしく現われていた。彼は眼前の初々しい彼女にいま殊更に魅された。返答は簡単だった、

「ええよ、一階の臨時休憩室やつたら押し入れの夜具を取り出したらそのまま寝られるわ、火の気がないからちよつと寒いかも分からへんねやけど、若い人やからすぐ眠つてしまうやろ、寝る前にお風呂にはいりたいんやろう、それはボイラーを止めてあるからないねん、辛抱してんか」

まだ食堂にいた事務長は、まさか今晚、よしこが医院に泊まらせて欲しいと頼みに来るとは思いもしなかつた。偶然のこととはいえ重富にとつてはおあつらえ向きの相談であつた。彼は微妙な含み笑いをしながら、よしこが恐縮しながら宿泊をお願いしたのにたいして、機嫌よくすぐに一階の空き室の使用を許可しながら、胸のうちでは、この機会を利用してこの娘が寝入った時間に忍び込みが可能のはずやと即断していた。さつちゃんは、

「ほらやつぱり泊まらして、くれはったやろ。そやけどあんた、今晚叔母さんの家に帰えらへんかったら、叔母さん、心配すんのと違うん？」

「今朝出るとき、今日は忙しくなるよって、もしかして遅うなったら、院長さんか事務長さんにお願ひして、一番仲の良い友達と一緒に医院に泊まるかも知れへんて言うてあるんやで、言うといてよかったわ」

さつちゃん是用事が沢山あるからといって、後かたづけが終わる早々に医院を後にした。よしこには勤めてから初めてになる医院内で一人での就眠だった。重富はよしこに休憩室で寝ることを許可したときに、あの部屋のドアの蝶番が錆びており開閉時に高い音をだすのが気にかかっていた、今夜の行動にはその音は障碍になるから、音が立たない処置をあらかじめしておかなければならないと考えた。

従業員たちが夕食会で飲み食いをしていたところ、医院の奥まったところにある、雑用係り夫婦の部屋では小さなちやぶ台を前にして笹田は二級酒を小さなコップで飲んでいた。

「今年も無事息災に終わったんやさかい、神さんに感謝して、あんたもちよつと飲んだらどない？」

「わて、お酒はあかんの、よう知ってはるやろ、大福こうてあんねん」

「寝る前にも甘いもん食べられるんか」

「大好きやからいつでもたべられますわ」

「そろそろ夕食会も終わるころやろ、明日から三日間静かなもんやで、あんたも朝寝ができるなあ」

「今晚は早う寝なはったら？わては夕食会の後かたづけがようでけるかどうか、確かめかたがた炊事場に行つてなんやかやせなならんと思うてるねん、そやからもうちよつと起きてまつさ」

「大勢が飲み食いしたらあとのかたづけが一仕事やな」

「女のひとが三人残りはるんやけど、昼の大掃除でくたぶれてはるよって、早ようにきれいでけへんやろうから手助けしてやらなしようないと思うてんね、毎年のこつちやし」

夕食会で男の従業員からからかわれ、羞恥心をあらわにして困惑している、よしこの姿からは、よしこ本人には自覚しない自然さでエロティックなオーラがこぼれていた。重富にはその姿を酒を飲みながらの楽しみとして時々目にしていた。そしてアルコールが入つ

たこの場の人たちががやがや騒いでいる最中にそれとなく席をたつて、炊事場に行きその隅に置いてある油さしを持って、その部屋に行き、蝶番に油を差すとドアを二、三回開閉して音が立たなくなつたのを確認する行為をやり終えると、ふたたびここに戻っていたが彼の中座を誰も気がついていなかった。重富は十四年前の復員後は、戦陣の中で培つた非倫理的欲望は表面に現れることなく、しばらくは波風が立たずに平穩裏に過ぎたのだが、目の前にいる娘が少量のアルコールで顔が赤らみ、恥ずかしそうに医院に今晚だけ泊まらして欲しいと言つて来たのだから、胸中に長く眠らしていた妄想が危うくゆさぶられる結果になつていた。娘がここに泊まるのはおれの欲情に、實際的な遂行の機会を与えるような機会が到来したと錯覚することになった。このときの重富の頭の中では、目前の娘から受ける性的刺激が引き起こした妄念と、事務長である職責を重んずる抑制心の両者は交錯していた。だけど酒の酔いに理性が衰え、妄念側に傾斜して行つた重富は、夢を見ているような非理性的な混濁した精神状態になり始めていた。

医院に入院中の患者は、治療中の何日間かを、二階

に数室ある入院者用病室を利用してゐた。年末より一月三日まで患者たちは自分の家に帰り二階の病室は無人になつてゐた。だが重富は病室ではなく一階の患者や付き添い人の臨時休憩室に泊まるよう指示したのは理由があつた。入院用病室はベッドだった。だが一階には六畳の部屋が二つ並んでゐる。この二部屋は以前は簡易ベッドを備えてあつたが、ベッドに慣れない利用者には不評で畳敷きに変更してあつた。この部屋で横になつて休息する人、また一泊しなければならぬ付添人のために布団が二組備えてある。その部屋で時間をつぶす患者本人も、付き添い人も緊張から解れ、魔法瓶からお茶をつぎ、みかんなどを食べてのんびり憩つてゐた。今夜重富が目論んでゐる行為を実行するには畳敷きの方が容易ではないかと考えたためであつた。

よしこは正月を迎える飾りつけがまったくなく、暖房のチームが通らない寒々とした殺風景な部屋を、一晩だけ利用することになった。今日の午後身体を休まず暇もなかつた忙しい労働で、下着は汗に濡れてゐた。

昨夜からの四日間は医院には入院患者がいないので、ポイラーは止めてあつた。冷えきつた浴室は水のない

浴槽と乾いたタイル床のまるで冷蔵庫のような状態だった。よしこは洗面所の壁に取り付けてあるガス湯沸かし器の温水を洗面器に受けて、ほんわりと酔って火照る顔を、軽く洗っただけだった。身体の芯から冷える十二月末の夜だから勢いよくほとばしる温水の感触が気持ちよく、最後は冷水を顔に掛けると意外なくらいにさっぱりした気分になっていた。事務長に指示された部屋のガタピシと音がする安っぽいドアをていねいに開け、内側にある何の役にもならぬようなドアの内側に取り付けてあるぐらぐらしたいまも抜け落ちそうな錠前に太い曲がった針金が錠前の役目をするようにぶらぶらしているのを、梓木にねじ込んである金属の輪にひっ掛けた。そして手探りに壁にある電灯のスイッチをONにした、60ワットでは眠るには明る過ぎるので五ワットの方を点けた。薄暗い光が部屋をぼんやりとした雰囲気にした。仕事着を脱ぐとたまため壁の近くに置き、かたわらの壁面に設けられた棚に重ねてあった洗濯済み患者用浴衣を、寝間着代用に借用した。小型の白黒テレビが壁際に置いてあったが、疲れているので早く眠りたい気持ちが強くてテレビを観る気にはならなかった。押し入れの上下布団と毛布を引き出して畳敷きの床に延べると、静まり返った病院

内の周囲にちよつと耳を澄ますと気にかかる音も耳に入らなかったので無心になって大きい息をしたのち、夜具に入り固い枕に頭を乗せ、毛布に包まれ、疲れた身体は早々に深い眠りのただ中に落ち込んでいった。

重富は深夜二時ごろに、よしこが眠る部屋に忍び込むと画策していた。夕食会の途中からよしこが彼に向けた、僅かに甘い感情のこもる微笑を思いだし、彼女は何故か知らぬがおれに好意を持っているのではないかという、願望的感触を抱いていた。それなら彼女を襲う策謀は案外たやすく進められるのではという非現実的な妄想が頭にあつた。不意打ちではあるが、おれの出現で彼女は突然眠りから起こされても、ごくごく短時間単純に驚くだけで済み、激しく怒って頑くかな態度になり、強く抵抗をすることにほならないのではないかと、彼がいまから起こそうとする暴力による制圧行為を軽く考えようとした。女性一般がいきなりこのような事態が惹起した場合にどんなに恐怖を感じるものかを彼は気が付かなかった。重富が軍役について以来今日までの生きて来た荒唐した内容の経験は、社会的には特異なことであつたから、普通の家庭で大切に育てられた娘の心理は少しも理解できなかった。

重富は食堂を出る前の言葉とはうらはらに、二階の各部屋内の状況そして一階廊下の外部との出入り口の施錠の確認もしなかった。しかし炊事場の勝手口の錠は抜きなく開けておいた。患者待合室には大型テレビが置いてあった。だがテレビ局がNHKのほか民放四局体制になっていたテレビ放送には関心はなかった。いまはテレビを見るよりも次の計画した行動に進むことに気持ちちが捉われていたので、待合室を素通りして事務室へ帰り、すぐにガス暖房を点けた。しばらく新聞、雑誌を眺め、ラジオの歌謡放送を聞いて、落ち着かない素振りや時間をつぶす様子だったが、事務室内の椅子を四脚並べると、身体を横にしてうたた寝をはじめた。どこでも眠れるようになれば戦域では無事に命を保つことが、不可能だったような過酷な過去をもっていることを示して、大きな軒を立てはじめた。たちまち深い眠りに入ったらしい。約二時間ほど経ち、彼は意識がよみがえり目を開き立ち上がった。壁の電気時計は一時半を指していた。椅子を元通りに戻すと両腕を胸の前で力をこめて、数回交叉した。その腕の動きには意中のことを実行しようとする意気込みが強く出ていた。防寒着の下の毛のセーターを脱い

で事務机に投げ落とした。そして再び肌着の上に防寒着だけを着た。次にズボンを脱いだ際に左大腿部に茶色い傷跡が二か所見えた、パンツを脱ぎ机の上のセーターに重ねておいた。ズボンを穿きなおした。行動を起こす場合は目的に応じて身に付けるものはなるべく少なく、身軽にと言うことを十数年前の中国戦線での経験で学んでいた。今夜も同様だった、自分の肌が標的の女の身体にもっとも密着し易いように用意していた。彼の身体はとも中年の男らしくない若々しさが戻っていた。そのように動くのが楽しそうであった。下腹は中年太りになりつつあり、ウエストが窮屈になりかけていたので、ベルトがなくてもズボンが落ちることはないだろうからベルトは不用だと考えて、外して机の上に置いて行こうとしたが思い返した、相手が暴れたりしたときには拘束用具に活用できると気が付いた。そして洗濯済みの白衣やシーツ、大型タオルなどを折りたたみ重ねてある棚から、タオルを一枚抜き出して手に持った。ガス暖房機を消し、両耳を覆うまでに伸びた油気のない髪を空いている手の指先で二回ほど梳いた。数時間前に飲んだ酒の酔いをわずかに感じて「まだ酒が身体に残ってるな、おれももう若いとは言われへん歳になつとるんや」と呟いた。机の抽斗からマツ

チとタバコを取り出し、ポケットに入れて廊下に出ていった。医院での上履きに、古兵になってからの軍隊時代の習慣で革製の丈夫で重いサンダルを愛用していたが、いまはそれを履かず、靴下のままの足で冷たい廊下の床板を踏んだとき微かに板が軋む音をたてた。昼間なら聞こえないほどの低い音だった。パンツ、セーターを身に着けていないのに目的に迫る興奮のために少しも寒さを感じていなかった。

重富は今夜の行動でもっとも注意しなければならぬのは、娘に声をあげさせないことだと考えていた。眠っているところを突然襲われた娘はとつさに絶叫するおそれがあった。娘の悲鳴は医院の奥にある用務員部屋に眠っている笛田夫婦の眠りを中断させるだろう、さらにその声は医院の外にも漏れるかも知れない。そうなれば、すわ事件発生と受け取り、木刀を持った笛田が廊下に飛び出て来るだろうから、笛田が万が一にでも現われる前に、いち早くこちらの正体が分からぬうちに、おれを年の瀬のあわただしさに付け入る空き巣狙いと思わせて一目散に逃げなければならないと考えていた。

医院には住み込みの笛田という六十代半ばの夫婦が

雑用係として、夜間の用心も兼ねて奥の炊事場の隣の一部屋に住み込んでいた。笛田秀夫は強い行動力のあつた能動的人間だった。老夫婦は毎年の盆も正月もどこへも出かけずここで迎えていた。

笛田には彼の強い性格がマイナスに働いて、長年現場社員として勤めた工場を辞めるはめになった過去があった。笛田がこの医院に来るまでには、染料工場の現場の熟練作業員だった。その工場は戦時中は染料製造と技術が似ている点がある火薬も作っていた。製造現場は原料のほとんどが濃硫酸、濃硝酸、濃塩酸、発煙硫酸、固形苛性ソーダ、ベンゾール、ナフタリンなどで強い刺激臭が製造現場には充満していた。作業場では木綿の作業服は強い酸のためにすぐにぼろぼろになっていった。使えるのは化繊か毛製の布で出来た作業服だった。独身だった笛田青年は入社当時は社員寮に住み、染料製造の最終工程の粉碎混合工場に配属された。その工場内部は染料の微細な粉末の空気中への拡散で極端に雰囲気汚れていた。染料の微細粒子は作業者の汗腺に、入り込み、終業時の工場内浴場で洗浄力の強いカリ石鹼で洗っても、完全には皮膚から除去できずに帰寮していた。そして夜の睡眠中の発汗とともに皮膚表面に排出されて、肌着、シーツはいつのま

にか染料の色が移り薄く染まっているのであった。きれいな緑色のマラカイトグリーンという染料をしばらく製造していた期間には、肌着、シーツ、枕カバーなどが薄く緑色に色づき、寮の彼の部屋に遊びに来た友人を驚かし、かつ同情を呼び「これびっくりやな、お前、結婚でけへんぞ、嫁はん気味悪るがっしてしもうて逃げていくで」と心配してくれた過去がある。このときの染料が皮膚内の脂肪と親和性があったなら染料中毒になっていたかも知れなかった。

染料工場の労働環境の悪さが、組合員五百余人の労働組合の結成の動きに従業員を向かわし、賃上げと工場環境の改善を要求する闘争が起きた。結婚はしていたが子供はなく、妻も近所の工場に勤めている共稼ぎだった中年の笹田は、労働者意識と正義感が強くさらに行動力も備えていたので、ストライキ闘争が起きた際には、いつの間にか、組合のリーダーグループの一人になっていった。共産主義や社会主義の本などを読んでいる従業員は何人かは存在したが、この時のリーダーグループには共産党や左派社会党の党員はいなかった。もっとも共産党系の人は目につきやすい表に出て来ない傾向はあったが、笹田はマルクス、レーニン主義の勉強を系統的にはしたことはなかった。しかし毛

沢東の著書は読み易く感じて矛盾論、実践論などは、熱心とは言えないが読んでいた。それは中国革命の影響を受けたジャーナリストのエドガー・スノー、ジャック・ベルデンたちのドキュメンタリーを面白く読んだせいだった。ただ鬱勃とした正義感が旺盛で頭の働きは優れた男だったから、他人と議論するのを得意とする弁舌の上手いところがあった。この工場の組合は化学産業の労働者が連帯している労連と名が付いた上部組織に加盟していなかった独立系であった。上部組織のオルグが一、二度来組したが、工場通用門のすぐ近い場所にある組合事務所の小さい部屋で応対するだけで帰って貰っていた。独立した労組の行き方に固執していたのは、裏で密かに動いている会社側の労働組合孤立化策謀の働きの効果であった。このときの労組幹部は「万国の労働者団結せよ」というマルクスの言葉は、自分たちには必要のないアジテーションとしか思っていなかった。従業員五百余人が団結したからこそ労働組合が結成できたという基本に気が付かない迂闊な人たちだった。しかし賃上げと環境改善の要求が、組合員下部から吹き上がり闘争に入ると、闘争戦術のまずさを補ってくれる、労連に加盟して争議経験を持つ他の労組の支援がなく、労連の上部組織から派

遣された労働運動プロの戦術指導もなかった。さらに闘争が少し長引くと会社側につき、労組を分裂させる組合員が多数現われ団結が切り崩されたのは、労使闘争によく見られる通常の現象だった。それらの逆風が吹き始めると団結力の弱さが原因で、結局組合は少しだけの賃上げと最小限の環境改善を得ただけで敗北した。その結果闘争の先頭で活躍した組合指導部の人たちを、組合員たちは守ってやることができずにリーダーだった者の半数は会社を追われた。笛田も退職した者のなかにいた。そのとき辞めた仲間と日配食品の配送業を立ち上げたが、経験のない人たちだったからその企業は二年間もしないで潰れ、同志たちはばらばらになって各々が自活をもとめて別れて行った。笛田は染料工場時代の二十余年間は三交代勤務で働いていた。一年の三分の一は深夜作業だった。この勤務が身体にかける負担が大きかったらしく、いまは六十半ばだが、六十歳のころから頭髪の半分は白髪になっている。五年前にヒラノ医院に来るまでは二、三の職場を移っていた。その一つの医療雑貨問屋の営業マンになって、市内の病院、医院をめぐって定年まで働いた際にヒラノ院長と知り合いになっていたのが縁で、ここに住み込み雑用係りとして夫婦で勤めだしたのであった。

重富は笛田の経歴を知っていた。笛田の過去の生き方から見て、多少左翼的思想を抱いている正義感と責任感の強い人間で院長が信頼しているのを感じていた。医院内に夜中異変を感じれば、かならず常備の木刀を手に自分の部屋を飛び出してくるだろう、笛田が六十五歳ぐらいなら男性としての厳しい気性をまだ保っているだろうから、その行動は十分考えられることだと判断していた。たとえ笛田が廊下に現れなくとも、歳末で連休中の医院の留守を守る笛田は、神経過敏になりがちな時期だから夫婦の居室の電話で、医院に侵入した怪しい者の存在を警察へ通報するかも知れない。その行動をどうして防ぐか、彼女が眠る部屋に眠りを覚まさせないようにひそかに入り込み、いきなり襲ったさいに娘に悲鳴を上げさせないことに尽きる問題だった。それには戦場で夜襲を掛けたおりの行動と同じだというふう考えた。かのときは屋外に出ている敵兵に覺られないように密かに行動して（この点が肝要だという経験上の知恵があった）十分に接近し、一瞬を争う果敢な動きに出て、歩兵銃に装着した銃剣で彼我沈黙裡に刺し殺すことで、ほとんど無音に終始したために少し離れている敵兵の同僚には察知されるこ

とはなかった。今夜は娘に声を上げさせない、つまり弱い娘の最大の防御武器である絶叫を封じめるために、隠密敏速な行動をとり、タオルを口に被せて声がかから外に出ないようにする以外には良策はなく、それが簡単かつ、のちのち暴行の証拠になりがちな、相手の肉体に傷をつけるようなダメージが起ることが小さいと判断していた。古い木造建物の廊下は歩くときには基礎部分が傷んでいる箇所では必ず軋み音を立てるので用心しなければならぬと注意していた。このとき重富は十五年前の小隊単位で、闇夜に静かにかつ大胆に行動した夜襲の光景を思い出し、久しぶりに胸中に生まれた緊張感が少しだけ懐かしく感じていた。そのころの命を惜しまない、若い皇軍兵士だった自分が戦場の泥濘のなかで、恐怖感を超越しての活躍ぶりを振り返り、心地よい昂揚した気分になっていた。

重富は事務所を出たときには気にせず足音を立てながら、目的の部屋に向かった、部屋に近かづくにつくりした足の動きになった。古い建築物の廊下の板は軋み音を立てやすいから注意した、足裏全体を水平に床板につくようにしながら周囲の気配をうかがいながら慎重に進んだ。その部屋の扉の前に着くと、立ち

止まり、うすぐらい廊下の前後を端の方まで透かして見て、何か気にしなければならぬことがないかを確かめた。そして数十秒の間、廊下に面した暗い窓に近づいて耳を澄まし、薄暗い内部をガラス越しに見つめ部屋の中に神経を集中した。彼の耳に届くのは薄いドア越しのとても軽く微かなよしこの熟睡中の呼吸音だけだった。そして内にも外にも物、人の動く気配はなかった。この部屋は治療中に気分が悪くなった通院患者の一時的休憩と付き添い者の憩いだけに使用されていたから、合板製の安っぽい外開きドアには頑丈な錠は不用であって、錠らしいしつかりしたものは取り付けてなかった。その代わりなのか、ドアを閉めたあとにかつてに開いたりしないように、固定する目的で、真鍮の小さいリングに鍵状針金を落とす、簡易な仕掛けがしてあった。だがドアの枠木は古く木目の弾力は失せていて、枠木にねじ込んだ小さなリングは、些細な力が掛かっても簡単に抜け落ちる状態であった。ドアを慎重に開けるとドアの蝶番が出す金属摩擦音はさきほどの油さし処置で無音だった。さらに塗装の剥げた薄いベニヤ板のドアは全体が下がり気味で、ドアの下端が下の枠木とこすれてばりばりと小さな音を出すことも知っていたからノブを持ち上げてドアの下端と

柀木が触れないように少し浮かしてゆつくり手前に引いた。こすれる音はしなかった。ドアを持ち上げた際にリングが抜けて畳に転がった音がしたが、ゴキブリが走りまわる音のようにかすかだった。

ネコ科の動物が襲うとする獲物に接近する身ごなしに似て、重富の身体は薄暗い闇に溶けてしまっているようだった。突然予想外のことが起きて、素早く対応できるように、背中をいくぶん丸め、体中の筋肉を柔軟にしていた。もしも娘が忍び入る人の気配で目覚めていたら、家人に見つかったコソ泥のように、一目散に廊下を走り抜けて逃げるつもりだった。たとえ目が合っても薄暗い中での一瞬の間だから娘が男を重富であるとは分らないはずだった。逃げる背後で娘が叫び声をあげても、事務室に飛び込み脱いだパンツとセーターと靴を抱えて炊事場の錠を掛けてない勝手口から外に飛び出る算段だった、その間は十秒ぐらいだろうと踏んでいた。

開かれたドアから畳の床に踏み入る際には、靴下を穿いただけの素足同然だったのと、古畳が膨らんでいるので足音はたたず、そのことへの気配りは無用だった。午前二時前、冷えきった小さな部屋に入りこみしずかにドアを開めた。天井から吊るされている5ワツ

トの電球の明かりの下の六畳間の窓寄りに夜具が敷いてあった。頭を壁がわにして、行儀のよい仰向けの寝姿で眠っている、脱いだ衣類は壁に寄せてある粗末な低い机の上に整えて置かれていた。大掃除で疲れ、夕食会での少々のアルコールを体内に入れた若い女は、この部屋にあった粗末な浴衣を纏い、深い眠りに落ちこんでいてびくとも動く気配はなかった。健康な体の熟睡中の呼吸音は、女性らしく低く軽く乱れはなく律動的だ。

ドアが開閉された気配と、廊下の冷えた空気が入りこんだのに、深く睡眠中のよしこの身体にはかすかな変化もない。男が静かに布団の傍に寄った。かぶり布団の上端から、黒髪が額に懸かり、安らかに寝入っている可愛いげな顔が、斜め上から薄暗いなかでもよく眺められた。リズムカルで小さな呼吸音は品がよかつた。その寝顔に彼は一、二分間目を遣っていた。するとかたわらに人がいる気配を、若く敏感な神経が感じたらしく、眠りが浅くなり呼吸が小さく変わった。いくばくかの時も置かずによしこがはつきり眠りから覚めて、誰かが部屋の中にいると気づいたときはもはや、慌てて寢床から起き逃れようとしてもできない切迫し

た状況になっていた。よしこははなはだしい驚愕に包まれ、咽喉が塞がりつつさには叫び声が出なかった。反射的に上半身を起こそうとしたが、敏捷に動きかぶり布団と毛布を撥ね退けた男の腕で、肩口を抑えられ、仰向きに倒れた。同時に厚いタオルで口を塞がれ、腹上にまたがられた。男の体重がよしこの上半身の動きを封じたのが、まったく斟酌や容赦のないはげしい制圧行為の始まりだった。よしこは襲った相手の顔を凝視して、だれなのか瞬間に分かった。それが重富事務長だという意外なことが信じられなかった。悪夢を見ているのではないだろうかと思っただった。

かぶり布団、毛布は壁ぎわに放り出され、枕はどこかへふっ飛び、浴衣姿の肢体が敷布団上に、動きのできない状態になって怖ろしさでこわばっていた。しんと冷える部屋で、大きく厚いタオルを握った腕にいきなり顔のま正面から突かれたのだから、よしこはショックで瞬間的に呼吸が止まったのだった。鼻にはまともに当たらなかったから、鼻血は出なかった。恐怖で戦き普段の可愛い表情はすっかり消えていた。そこには重富が兵隊であったころの十数年前に凌辱した、姑娘の顔と姿態の記憶がオーバーラップして映る顔が目前に現れていた。その顔は戦場の兵隊だった重富の

尋常でない精神状態が逃げ遅れた姑娘を犠牲にした無法行為の結果作り出したものであった。

そのころ用務員部屋では一度は眠ったが、老人にありがちな中途覚醒の状態で夫がまず目覚めて、ぼんやりしていると、夫のいびきを毎夜耳にしながら眠る習慣になっていた妻は、いびきが消えて部屋が静寂なようすになったために目が覚めた。

「あれっ起きたんかいな、よう眠っていはったんやのに」

「わてはあんたはんのいびきが耳に入ってないと眠むられへんのやで」

「わしが居らんようになったらどないすんねん、一人でも眠られるようになってかな、あかんやないか」

「あんたはん、どこも行けへんのやろ、そやからそんな心配することあらへんわ」

「さっき、目が覚めたついでに小便しに行ったんや、ほいで窓から自転車置き場見たら、事務長さんのオートバイが、まだ止まってんのが見えてん、ほんだらまだ医院内にはるんちゃうやろか思うて、事務室の前まで行ってみたんやけど」

「事務室、明かりが点いてまっか」

「点いとらんかった、どうしはったんやろ」

「事務長さんが、車ほつといて帰ってしまうことは考えられへんわ」

「酔っぱろうたから、バイクを置いて帰ったんかな」

「事務長さんの家は駅から遠いと聞いているさかい、オートバイか自転車がないと通うことできへんて、だれかいうてはったんを聞いたことおますで」

「ほんだら、事務室の中で眠ってるんやないのかな、酔うてしもうて」

「そうかも分かりまへんな」

「風邪ひくがな、わしがもう一ぺん行って事務室の中、確かめてみるわ、眠ってはたらここに来てもろうて眠って貰うことにしようか」

小柄な笛田は習慣的に懐中電灯を手にとるとふたたび事務室に行き、窓ガラス越しに内部を照らした、ストープは消えており、人影はなかった。笛田はもしかすると、ふとんが常備してある臨時休憩室に、眠っているかも知れないと思いつく方へ向かった。その部屋の中でよしこが犯されようとしているなどは、夢にも知らないまま、廊下に足音を響かせながら近づいて行った。臨時休憩室にあと五歩のところに行ったら、医院は全休の夜だったから無人のはずだった部屋に、

窓ガラスには小さな電球の淡い灯りが見えていて静まりかえっていた、笛田はこの部屋で事務長が寝ているのだと思いきみ、自分の足音が原因で目を覚ますと気の毒と思ひ、その場には一秒も立ち止まることなく自分たちの部屋に引き返した。

臨時休憩室のなかでは、ほとんど音を立てないで男女は攻防戦をしていた。よしこはタオルを嘯まされて声が出せなかったし、重富は廊下の足音に気が付き、しばらくの間よしこの身体を抑えたまま行為を止めていた。よしこは廊下の足音で誰か来たらしいと知り、男は暴行を中止して逃げ出すかも知れないという淡い望みが生まれ、早く来てほしいと願っているうちにこの部屋の前までには来ないで、すぐに引き返したらしく廊下の足音が離れていき聞こえなくなった。よしこはなんとわたしは運がない人間だろうかと悲しんだ。廊下に誰もいないとはつきりすると重富は行為を再開した。よしこが両腕で掴みかかったのに対して片腕を振りあげられて、その腕はひどい痛みとしびれで脱力状態になった。もう一方の腕は片方だけでは力のバランスが悪くなり、そのあと腕での抵抗はできなかった。執拗に迫る男の力に耐えながら、柔らかな肉体を

強張らし、揺らし、また上体を波打たせ、両足をばたつかせ、この場から逃げようと夢中になって逆らうとしたけれど、この局面を変えることはどうあがいてもできなかった。両足で空を蹴りあげたりしていると、両膝の間隔が少し広がった隙に、ズボン穿いた両膝を差し込まれた。いままなおタオルを握った腕が顔を抑えていた。豊富の腿とよしこの胴はびったりと重なる状態になっていた。だが二人はまだ裸体ではなかったから男女の肉体の生々しい感触は感じなかった。よしこは男の身体との密着の経験がなかったから、この状態に大変な気持ちの動揺がうまれていた。なおもよしこの両足は空しく宙を突き上げる動きをつづけていた。このときからよしこは心理的に突き崩された状態になって行つた。抵抗心は萎えだし、激しい拒否動作をつづけようとする勢いがみるみる衰えてきた。

押し倒されてからしばらくは、男の着ていた防寒着の上着の粗い繊維がゴワゴワと触れる感触が、よしこの二の腕の柔らかい肌には、鑢を掛けるようであった。それが若い女にとっては辛抱できない、荒々しい接触感をもたらしていたから、それだけでも彼女を、嫌悪と恐怖に陥れる原因になるものだった。女の身体の要

所をよく知っている、男の動きよってしつかりと押さえつけられ、いまは身動きがまったくできなくなつていた。よしこの体力は、全力の抵抗をつづけたのでかなり消耗していた。そのころには身体の動きに、諦めをともなつた、鈍さが現れてもきた。男は相変わらずタオルを口に押し付けていたが右、左の腕を交代させながら防寒上着を脱いだ。男の上半身を、包むものは薄い半袖のシャツだけだった。部屋の中は相変わらず寒気が占めていたが、二人とも格闘していたから寒さを感じることはなく、汗の粒が額、背中、胸に小さく浮き出ようになっていた。よしこは咽喉が渴いていた。二人の間では、圧倒的に体力に差が存在していたから、娘の抵抗を封じるためにと男が考えていたベルトは使うまでもなかった。よしこは、腿の間に男のズボンを穿いた足を入れられてしまったということ心がひしゃげる行為だった。かつて味わつたことのない恥ずかしさに全身は貫かれていた。

有無を言わせない力の差が、彼女にこれ以上の拒否を貫くのは、不可能ではという、落胆した気持ちを起こさせてもいた。始めに襲われたときには、男のあまりの激しい態度に意に従わなければ、殺されるかも知れないとの恐怖感が起こつてもいた。だが本能的に反

抗をしていた。最初こそ「絶対に嫌だ、どこまでも拒もう、決して許さない」という決心だったのが、このまま抵抗をつづけると、男はいまのうちはまだ欲情だけがほとぼりして、私の身体を自由にしようとしているのだが、抵抗しているうちに急に感情が暴走して理性では抑えることが出来なくなり、逆上し突然むきだしの肉欲の迫りから逸れてしまい、執拗に逆らう私が憎くらしくなり、殺してしまえという突発的な乱心が起こりはしないかと思う恐怖が生まれ、背筋が冷たくなっていった。その恐怖が起きてからよしこの頑な抵抗は微妙に脆弱な形をなっていた。その結果僅かにだが「もう抵抗を止めよう」という心が崩れる方へ動いたとき「受け入れれば殺されまいだろうから、命は安全だろう」という奇妙に錯綜した心理になっていた。よしこの抵抗が若干下火になったところで、重富はよしこの膝の間から足を抜いた。よしこはこのことで少しだけほっとしたのだが、まだすべては終わってはいなかった。彼はよしこの腹にまたがり乗るかかった、彼の体重が彼女の身体にあまり負担にならないように両膝で自分の体重を支えた。この行為は彼女に残っていた抵抗心を削いだ。そして格闘中に背中側から、横腹の位置にずれて来ていたゆかたの紐の蝶結びの片端

を、ぐいと引きほどき、乱れ緩んでいる寝間着の胸元を、ためらいのない手つきで両肩の幅まで左右にはだけた。この動きのなかで上半身を包んでいるうすい肌着シムシメの片方の釣紐が切れた。考えて来た手順であったろうが、重富のやることは手荒いが万手慣れていた。その巧みさは復員後から今日まで幾人かの女が絡む私生活のいかわしい内容を物語っていた。娘は浴衣や下着が自分の身体を充分に覆い守っていない状況に到ると、疲労と気落ちによって、にわかにな力を失くし、弱い反抗の動きさえもはや出来なくなっていた。男は邪魔つ気なものを、自分の身体から引き剥がすように、粗い生地シメシメのズボンを脱ごうとし始めた。純情だったよしこは腰回りを除く肌着を剥ぎとられる状況に到って、これまでおぼろげで曖昧な想像の中にあつた、女には致命的で決定的行為が、現実となつていま迫っているのだと覺つたと同時に気を失いはじめ、目の前が暗くなり、物音も消えて失神の状態になつてしまつた。彼女が氣を失つたときに重富は脱ぎかけたズボンをふたたび穿き直した。

部屋の中は格闘する二人の粗い息はいまは収まり静かになつた。重富は娘への制圧行為に取り掛かつてか

ら、思いの外抵抗が強いのに驚いていた。彼の頭の中には、今夜の夕食会でよしことさつちやんに付きまわっていた二人の男たちを、追い払ったときからのよしこの表情には、自分に対して親しさの気持ちがかもつた温かい視線になっていたことを意識していた。彼女の眼差しにこもる感謝といくぶんの甘さに気づいていたからもしかすると、さつきまでの力を尽くした拒む態度をやめて、身体を柔らかくするのではないかと予想していた、だがこれは独りよがりの想像に過ぎなかった。彼女は最後は激しさを弱めたが、終始彼の予想を裏切る強い抵抗姿勢をつづけるのだった。

今夜のよしこの抵抗する激しさと蘇って来た記憶があった。当時二十四歳の伍長だった重富が、戦場になった村で逃げ遅れたのか、牛小屋の干し草のなかに隠れていた、粗末な衣類を着た姑娘を三人の戦友とともに、発見して直ちに輪姦凌辱した場面では、姑娘の激しい抵抗は受けなかったのだ。今夜におけるよしこのように、占領地で捉えることが出来た女たちは、日本兵に抵抗する態度を示したにしてもしつこくはなかった。彼女らは小さな抵抗でも兵隊の手を煩わすときには即時、日本兵が常時携帯している銃剣での、刺殺につながるのだと覚っていたからかもしれない。彼女ら

は人間としての矜持をもたない、東洋鬼（トンヤンキ）と呼んで怖れている兵士に身柄を捕らわれると、自らの不運を深い悲嘆のうちに受け止めて、わが身が蹂躪されるのを諦めていたのだろうか。彼の頭の中にはそのときのシーンが途切れ途切れにフラッシュバックして、今夜の行為とが頭の中で入り乱れていた。

重富は過去の行為を切れ切れに思い出すにつれて、まず南京占領時の状況を実行者である古兵たちに聞いた惨憺たる有り様に強いショックを受けたあの時のこと、そしてその軍の伝統の中に行動した自分たちの戦場に在る時の狂氣的残酷な振舞いとはまったく異なる、捕虜収容所でのアメリカ民間団体の慈善医療行為に思いを馳せた。収容所で初めて会ったに過ぎないクリスチャンの彼らが自分の難治だった梅毒を日本軍にはまだなかった新薬で治してくれたからだだった。彼らの平常心で行う無償行為の温かい行動を、いまでも胸のうちでは彼らの親切心、人間にたいする愛情には重富の帝国陸軍思想で固められた頭では理解がつかず、不思議だった。ただあれ以来、しかとした理由が思い当たらない行為にただ単純に感謝していたのだ。捕虜だったとき日曜日に医師やナースに誘われて仮設教会に行き、皆が歌う讚美歌の少し悲しく、甘いメロディーに、

これまで自分が育った世界とは異なる雰囲気に浸った
楽しさが胸底から湧いてきたのであった。

そこに横たわるよしこの失神した顔は、いまさきま
での恐ろしい思いの緊張が解けているらしく、かわい
い顔は眠るようで、険しい表情は消えている、呼吸は
静かに安定していた。よしこの顔を彼はまじまじと五
十センチぐらい離れて見ていた。——彼女が面接で医
院に現れたとき重富は、自分よりもかなり年齢が下の
彼女には第一印象から好感を抱いた。おれが若い時に
会っておれば必ず夢中になっただろうと思っただけであ
った。——よしこのちようど女の成熟に達しようとする
容貌は、少女の可憐さと大人の女の艶麗さが混然と
なっている魅力があった。見ているうちに、彼女のあ
まりの青春然とした姿の純粹さに感心して、おれはひ
どいことをしているんだと少し感傷的な気持ちで湧い
てきていた。腰から下はまだ浴衣が肌を包んでいたの
で、重富の眼に入る彼女の肉体ははだけられた胸から
上の部分だった。まだ脂肪の層が薄い胸には、等しい
大きさ、同じ形状の、男の指や口に乱された経験のな
いと推量される双丘は、ふくふくした姿で柔らかくそ
こにあつて胸を豊かにしていた。乳首はあるかないか

定かでないほど小さな存在だった。乳房は手のひらに
しっくり収まりそうだった。女性としてはまだ成長過
程にあつて、少しおくであるかも知れない。あと二、
三年もすればその乳房は手のひらに満ち溢れる具合に
なるのかと彼は思った。いまの乳房がしめす安らぎ感
を薄暗い電灯がそのイメージを盛り上げる。男の目に
入るものは、何もかも若い女の特長を示す美しさばか
りだった。彼女の上半身を覆うもののない赤裸々なよ
うすは、えも言えぬ清浄さが薄暗いなかでは神秘性さ
え感じられ、無感動、非人情に生きてきた重富の心は
この美しさにほだされだしていた。彼の青春後期の五
年間を侵略戦に動員され、中国戦線で壊れ変形してし
まっていた重富の最初の人格の魂を呼び起こした。清
浄感のある若い女のつややかな肌が、彼の心を癒して
くれるように感じられたのであった。独身の自由さに
慣れて放恣な性生活を送っていたことが原因で、自分
がいま性病を再発しているのではないだろうかという、
不安をこのとき突然思い出していた。そして中国で受
けたクリスチャンの米人の善意によって、前線にいる
間苦しんでいた性病が快癒したときに生まれ、胸一杯
に占めた他人に対する感謝の気持ちが少ないから蘇っ
て来ていた。いまよしこを犯せばおそらく性病を伝染

させてしまうかも知れないと考えた、それも幾つかの性病の中でも性質の悪い梅毒だった。犯そうとしている相手が戦場付近の中国女でなく、復員してからは何かしら情が動く対象になっていた同胞の娘だというだけでなく、中国女へは待たなかった愛着の感情に胸が湿り出した。気絶しているうちに犯されて性病に罹患した娘の悲しさ、口惜しさの痛々しい気持ち想像した。せつかくの美しい顔が深い苦悩で、暗い表情の気の毒な娘になるだろう。二年前によしこが医院に就職してから、おれは彼女に単なる好意というよりも、その感情は恋に似た慕情を抱いていたというのに、社会に出てきて二年弱ほどしか経ってない娘を、性病にしても平気ではおれない気持ちだった。彼女を愛くるしく思い、二一年間に亘り恋着がつづいていたのだった。重富にそのような性格が彼の内側に存在していたとは、人間には他人には量り難いものがあるという例だったが。恋情をいまはつきりと感じた気持ち、この気持ちは彼の胸中に僅かに残っていたところの、彼には似つかわしくないような純粋な男心だった。これ以上の行為をつづけるのは、その貴重な自身の気持ちを自ら蹂躪して、己の魂を完全に消滅することになるのだと気が付いた。

加えて氣を失い、正常の知覚を持っていない状態の女を犯すという、男らしくない卑怯な行為を否定する気持ちも少なからずあった。それなら声をかけるか、身体を揺さぶって正気づかせることもできただろうが、それは大人げない自分を曝け出すようで、大正生まれの重富の感性では可能なことではなかった。さらに十九年まえの入営の折に兵營の門前まで送ってくれた、優しい心配りをいつもしてくれていた妹節子の姿を思い出していた。そのころの節子の心は、周囲の男たちを、兄を何一つ疑わない純情さがあつたなあという懐旧の気持ちなどの数々が、意識が飛んでいるよしこの身体を見ているうちに、初めての人間の思惟が生まれつつあったのであった。このさまざまな懐旧の感情に浸っていた重富には徐々に気持ちがほぐれ、後生に大きな影響をもたらす心理的变化が起こっていたことで、これ以上の行為に突き進む気持ちを失くさせていた。重富の情欲が鎮まってしまうだけの部屋はよしこの息づかいの微かな音がしているだけの静けさだった。重富に薄暗がりのなかで心的転機が突如起こったのは、回心、改心、懺悔など宗教的影響はなかった、人格の変化もない、強いて言えば精神の屈折を伴う転向に似たものだったろう。

いくばくかの時と言つてもほんの短い時間であつたが過ぎた。よしこは自然に正気に戻り、氣を失う前が切れ切りに蘇つた。部屋には重富の坐っている姿があつたが、あのことは自分の知覚が飛んでしまつていてあいだに終わつてしまつたと信じていた。その結果彼女には重富が何も怖い感じの男ではいまはなくなつていた。憎いし、この仇をはらしたいと痛切には思つていた。だが妙なことに、男の一方的な暴力行為であつたとは言え、結果的にはわたしと肉体が結ばれた男なんだという、不条理な繫縛感が女の本能によつて理性ではいくら否定しても生まれそうな心理状態になつていた。このために矛盾錯綜した奇怪な深い泥の中を歩くような氣分で、いまの事態を受け止めるより仕方がないのだという認識が、彼女の胸に複雑に混ざり合うことになつた。口を塞いでいたタオルは外されていた。ぼんやりした頭で氣を失う前までの恐怖を思い返し、結局最後まで抵抗しても身を守れなかつたのだと思ひ込んでいた。あれからのちに体験しなければならなかつたろう場面は、氣を失つていて知らずに過ぎたことをむしろよかつたと思つた。当然わたしの身体は元のものではなくなつてゐるはずだと信じた。浴衣ははだ

けられて白くきめ細かい肌の胸は露出したままであつた。素早く、横になつたまま片側の吊り紐の切れたシユミーズを元の位置にした。切れた吊り紐そのままでも仕方がなかつた。浴衣も起きあがらずに身体をくねらしてなんとか上半身を包んだ。結び紐も結わえ直した。被り布団や毛布、枕も引き寄せて元通りにしてゐた、それらの行動は音をたてないようにひっそりした動きのなかで出来た。よしこは自分が氣を失う前の身体ではなくなつてゐるはずなのに、なぜ腰回りを包む肌着をそのまま穿いていて、まったく汚れていない状態であるのが不思議だつた。浴衣の前を合わし帯をむすび直したら、急に氣持ちはセンチメンタルの淵に沈んでいつた。よしこは布団から起き上がらずに横たわつたまま、聲を立てずに泣いた。昨日までの身体でなくなつたと思うとただただ氣持ちが消沈する一方であつた。だけど身体全体の感じはこれまでとは微細に到るまで何も変わらないのが不審でもあつた。もつと身体の何処かに今までにはない何かを感じられてもよさそうなものだがと半信半疑の思ひでいた。そして今夜にも妊娠しているかとも思うとぞーとしていた。このときには自分の平凡な一生がこの夜限りで終わつたと思ひこんだ。年が明けてから、重富は無口そうに見え

る男だが医院の中で今晚の行為を、どこかで男同士の飲酒の歓談の際に気の弛みでふと漏らすことがあるかも知れない。すると時間を置かずして私は衆人の、目前で裸にされるのと同じことになるのだ。そしてその噂はたちまち広がるにちがいない。そうなると誰にもがやって来る平和な明日という日は、私だけには来ないのだという悲観的な気持ちになり、他人に知られる恥には耐えられないから、一思いに自死しようとの死への誘惑があった。だが故郷にいる両親の嘆きを考えると死ぬことはできそうでない。私さえ黙って耐えるのべばいいんだ、油断した私が悪いのだ。いやなことがあった大阪を離れて、誰も知る人のいない土地へ移ろうと思ひ、そういうことを考えねばならなくなつた自分が哀れになつて涙がこぼれて止まらなかつた。死のうという気持ちと大阪を一刻も早く離れようという気持ちが浮かんだり消えたりする情意の著しい混乱が、彼女の内側に起きていた。天井から下がっている5ワットの灯火は部屋を薄暗い雰囲気にしていた。気持ちの落ちこんだよしこにはこの暗さが合っていた、これが80ワットや100ワットの電光の下にいたとしたらいたたまれなかつたに違いない。正月を迎える準備のパーマを掛けたばかりの髪型は、散々に壊れ乱

れていた。四方に広がった髪の一部は顔にかり、不意の襲撃に沈み歪んでいるだろう面差しを覆い隠してくれていると感じていた。その髪の毛を涙が濡らして光っていた。

重富は非力な女を相手に、だんまりの中であくなき暴力を振るつた冷酷な性格の彼にも、若い女を犯そうとしたのちに気持ちが変わつたが、当初にあつた娘を犯そうとした欲望の僅かな高揚感が火照りになつて残っている。声を出さずに涙をこぼしつづける女のかたわらで衣服を着た。下着を着用していなかつたから、ズボンと防寒着だけだ。それでもいましてがたの行為の直後だから、身体が温まつており部屋の寒さは気にならなかつた。胡坐になりポケットからタバコを取り出し啣えた、火を付ける前に端を前歯で軽く噛むくせがあつた。いまは噛むのに日ごろよりも力がこもつていようだった。彼の内部に存在していた徹底的に非情になることのなく行為を中止させた胸の底に隠されていたもの、それは米人クリスチャンの好意で助けられた経験から生まれた気持ちの和らぎ、そして妹節子の兄を大切に思つていてくれる温かい心を思い出して優しい気持ちがわき上がるなどの自分の心情に従つたの

をいまは良かったと思っていた。

彼の暗い心のかたすみでは日中戦争がまだまだつづいているのかもしれない。つづいているからこそ今夜狂的な行為を行うとしたのだろう。マツチを擦るのに軸木をつまんでいる右手は大きな動作をして発火音が静かな部屋を満たした。マツチの炎は厭世的な気持ちで横たわるよしこの顔を、薄闇に浮かびあげた。よしこは涙の滴りを目の端から零してはいたが、泣き崩れてはなかった。何かを考えているようすだ。彼女は自身の自身が陥った現実としっかり向き合おうと考え始めていた。事実の真の結果を知らない彼女の胸の中には元の身体に還るべき術のないことへの残念さと、昨日まで輝いていた青春は喪失した結果に生じた二つの大きな空洞ができていた。タバコの火のわずかに明るい光りをためた涙滴が、ときどき目じりから耳の方へ滑り落ちた。重富は煙を肺に大きく吸い込むと一息に吐き出した。欲情の興奮が神経を疲れさせたためか、タバコは味がしなかった、むしろ酒を飲みたいと思っていた。タバコの臭いが部屋に漂ってきた際に、よしこは呆然とした気持ちでいたが、ことを済まして満足した男が一服するタバコなのだと思いきんでいた。重富は今日のような暴虐なことに、慣れていく極悪の男な

んだと考えていた。窓外が明るくなるまでにまだ時間があるようだし、ふたたびわたしをいじめに掛かるのではないだろうかと心配しながら、暗澹とした気持ちになつたまま、布団から離れないでいた。それにしても自分の身体が何事も起こらなかったようなのが不思議だったし、重富を取り巻く空気がほのかにひと肌の温かさを感じさせる変化が起こっているように見えるのも不思議だった。

タバコを吸う重富の頭のなかは空白に近かった。そのふとんに伏せて涕泣している娘のことと、十数年前の湖南省の部落での非情な狼藉とが混ざり合い軽い興奮の迷走状態が生じていた。今夜のことで彼の左もの古い戦傷には、十数年の間起つたことのなかったのだが、久しぶりに格闘のようなことをして普段使わない筋肉を使つたためだろうか、鈍い痛みがさきほどから生じていた。二十四歳の伍長だった重富が逃げ遅れた姑娘を凌辱した場面の記憶が、脳裏に途切れとぎれにフラッシュバックしている中での喫煙だった。二本吸った。一瞬だったが彼の身体を経験のない寂しさと恥ずかしさが一緒になった物悲しい感情が走り抜けた。テレピン油を浸みこませた布で軽機の手入れをし

ていたころの戦場の虫になっていた自分が懐かしかった。タバコを吸いながらよしこの顔を伺ったが、およそ彼女は今夜あったことを誰かに訴えそうにはなかった。重富には疲労感と同時に女に性病をうつさずに済んだことでの人間らしい気分が生まれていた。この疲れた感じは同胞の女が相手だったために中国女には使わなかった神経的なものだった。タバコを吸う間に、重富は犯そうとしたよしこの身の上を何も考えていなかった。呆けたような気分でしたに過ぎない。

このとき医院の回りの壁際沿いに誰かがゆっくり歩く気配に重富とよしこも気が付いた。その音は小男の笛田の足が出す音ではなかった。体重の大きい人間が出す歩く音だった。重富が予想もしなかった人間が、ひそかに医院のそとにいまやって来ているらしい。患者が訪れたなら表の戸口が閉まっていれば、大声で内側に呼びかけて来るはずだ、だが呼びかける人の声はせず、ガラス窓の枠を何のためにか揺らすような音を立てて、次々に窓を移って行く。強風がときどき強まる場合は自然に窓枠が騒音を出す、いまのは人為的に起きている音だと、重富もよしこも気づいていた。よしこは外に来ている人は誰かは知らないが、もつと

早く来てくれていれば、身体は無事でいられたのにと
思うと、自分の運の悪さが悲しくて、途切れかかつて
いた涙の滴がふたたび流れ始めた。

医院の辺りは市場、工場、住宅、商店、アパート、狭い校庭の小学校が混在している。少し先にある卸売市場に青果、鮮魚を仕入れに向かう商人たちが、あと二、三時間も経てば軽トラックで通りだすだろう。市場に近い二十四時間操業中の工場へ行く厚手のジャンパー、マフラー姿の一番方の労働者も弁当を持って明日からの正月連休を思いながら足早に通るだろう。医院が面する道は裏通りだったから通勤の人たちは表通りの車を避けて医院の前を歩いた。早番の労働者たちの出勤の群れが途切れてしばらくすると、仕事を終えた夜勤の労働者の帰る姿がこの道に現れる。今日から正月三日までの間に心行くまで同僚と麻雀を楽しもうと計画している男たちは場所予約のために麻雀屋に帰宅途中に立ち寄った。

重富は外に誰とも知れない人間が現われているように、警戒して慌てて立ち去る自分の姿をよしこに見せたくなかった。そこでもう一本タバコを啜えて落ちていたところを見せながら、ここに長居するのは、自

分が不利な状況になりそうだと判断して立ち上がり、娘をその場に残して、「寝とりや」とぼそつと呟やいた。その声はさきほどまでのけもののような行為をまったく感じさせず、同じ人間とは思えない静かなものだった。しかしよしこには悪魔の声のように聞こえたのであった。そしていまの態度は狂的に襲って来た今夜の重富とは別人のようだった。このときの重富は南京事件の話を古年兵から聞いたときに自分の内部にひそかに生まれた十二月という月に起こる状態犯罪人気質の発作が収まったのであろう。正常に還った重富はよしこがおそらく情事には未経験者で今夜自分の身体の上になんか起こったのか、起こらなかつたのか、一体どうなのか分からないのではないかと想像していた。よしこが持ったであろうそれへの懸念はいつかはつきりと分かる機会がくるはずと思いつつ、強くノブを掴み、ドアを軋ませて部屋を去った。その表情は、なんの感情も現していなかつた、だが彼が狂的狀態なときに実行しようとしたことに撒しきれなかつた弱さをしめす影が仄かにあつた。午前二時半だった。建物を出たのは玄関からか、炊事場の裏口からか分からない静かな動きだった。直後オートバイのエンジン音が自転車置き場の方角から聞こえた。姿を消した重富は、今

夜のような暴行を働いたからには、この医院には居ることができない状態になつたと考えていた。二年間ひそかに好意を抱いていた相手だったよしこには、悪い印象を残したまま今から永訣になると思いこれも宿命みたいなものだったのだと諦めていたし。医院とは縁を切つてどこかに行くべきだろうと決心していた。「寝とりや」の声は、彼が部屋のドアから忍び込んでから発した初めての声だった。重富が部屋を去つたのでよしこは危険な状態が再び起こることはないと思ふ。安心する思いにようやくよくなつた。重富が今夜のような暴行場面で終始声を出さないのは、中国戦線にいた十数年前と同じだった。

重富は医院を去りながら、復員してからの無事に過ぎた十四年間を無にしてしまう行為をやりそうになつたのを後悔していた。仕事場の医院の一部屋を醜状の場にしようとした自分の愚かさを恥じた。ふたたびよしこ何かの折に顔を合わせるのが怖ろしかった。この医院を辞めて何処かへ行こうと思つていた。どうしたわけか、今夜は魔がさしたのだと思つた。「すれすれのとこで止めといてよかつた」と呟いた。重富の心ではあのときに予想もしない訪れだった、娘を思いやるどたんばでの優しさなどは、自分には根っからない

はずだのにとそのときに中止の思慮が起こったことにはわれながら不思議だった。

重富が去った部屋をよしこはすぐには出ていけなかった。深夜には外へ出ても行くところがないので、布団に横になって自分への哀れな気持ちが進み上げるのをじっと耐えていた。悲しみと苦しみと後悔、そしてかつて味わった経験のない男に対する憎しみの万感の思いを胸に抱きしめていた。自分の波風のない平凡な人生が今夜終わったのだと考えていた。朝八時ごろになれば雑用係りの笛田が、廊下をやってくるだろうか。それからその前にここを出ようと思った。わたしがここに泊まったのを知らないはずだから、この部屋にわたしがいるとびつくりするだろう。先ほどまで重富がいたことはもちろん知っているはずがない。昨夜ここで起こったことは何も知らないと思うけど、大きい建物とは言え同じ建屋の中だったから、それとなく笛田夫婦は気が付いていたかも知れない。笛田夫婦はかならず男と夜の数を時間を過ぎたわたしの行状を疑って、あばずれ娘とあきれるにちがいない。口惜しいけどそう思われるだろう。いろいろ考えると目を瞑っても当然

のこと眠気は来ない、あれやこれやと悲しいこと、口惜しいことの思いを反芻しながら時間を過ごすことになった。時間が経つとともに、思い乱れている彼女の感情の高まりも落ち着いてきた。

重富が去った直後は死のうとか、この地を離れようとかばかり考えていたが、少し気持ちが立ち直つてくると重富に一方的に犯されたとはいっても、彼と関係ができてしまった事実は覆せない。男女間の消し難い繋がりが出来ているんだと思ひ込んだ。彼女は難しいことになってしまったという思いが、しばらく虚けた姿で横になっていられる中に生まれてきた。それにしても胸の底には、完全にそうなったのかどうか、もうひとつ明確でない気分があったのは否定できなかった。そして嵐が去ったあとの空虚さが部屋に残っていると感じていた。なぜ空虚な気持ちが微妙に湧いてくるのだろうか、よしこはあるうことか、自分の心には重富の後ろ姿に引かれる不思議な弱い感覚が微かに生まれているように感じて狼狽し、呆れ、嘆いた。彼はわたしを好きだったのではないだろうかときさえも思うぐらいに、重富が去った直後だったこのときよしこの精神は衰弱していた。だがよしこは少し時間が経つと重富が自分の身体を自由にした最初の男のゆえに、女性に潜在

している本能的感情の弱点を突いて、憎悪感情さえも盲目にしてしまっているのだと、気が付いた。そしてよしこが朝までに考えたことは、乱暴を働いた重富のことだった、事務室にいる重富は少し目の奥に暗い影があるように見えた男だったが、普段の仕事上の接触に気になるところはなかった。あの年齢になっても身だと聞いていたから、人には言いにくい道楽に熱中しているものがあるのか、独身で気楽に人生を送るのがいいと考えているのか、身体にどこか普通でないところがあつて結婚生活ができないのか、用心深く秘匿している女が存在するのかなどであつた。付き合つている女性がいるなら今夜のような性的暴行行為をしたのは何故だろうか、重富に対してようやく客観的に考えられるようになりだしてから、よしこは冷静になり気持ちには立ち直りだしていた。気持ちが落ちついてくると、よしこの顔の輪郭にもやわらかさが戻つてきたが、その顔つきは今夜以前の彼女ではなくなっている。目の表情が昨日までのような短純さは後退していた。悲しみ、悩み、後悔と口惜しさの極北をさまよい、加えて自分の身体が変化しているのか、いないのかの疑問が覆つた夜を過ごしたあげくの彼女の眼はひとかたならぬ光りが宿るようになっていた。

よしこは冷静になつてから今夜起こつた内容を振り返つた。襲われてから声を出したのは、ふとんに仰向けに転ばされた瞬間、意識しないで叫んだ、短くかすれた驚愕の声だけだつた。それも熟睡を突然断ち切られた状態であつたから、声らしい声を叫ぶことにはならなかつた。瞬間に口を塞がれたために咽喉の奥で、声にはならない悲鳴を絶え間なく発していたに過ぎない。男は事前に練り上げてきた行為を、無言のうちに実行した。このとき、私が仮に声を出せても、その意味が分からないほど錯乱状態にあつたらう。初めから終わりまで言葉が発しなかつた理由をもしも他人から問われる機会が来ればそういう状態であつたといふしかない。男にとつては、私が眠りこけているときに襲うのは、この医院の中は自らの掌を指すように、隅々までを知悉した職場であつたから、こゝが終わるまで、呼吸一つ乱さずに、やり遂げることが可能な条件のなかでの容易な行為であつたのだらうと推量した。

重富が、医院から姿を消すまでの一週間には、当然のこととしてよしこは医院を退職していたからいなか

った。重富は自分が抱えていた仕事の整理をする時間だったらしく、軍隊生活で叩き込まれた几帳面さを見せていた。彼が仕事の整理をきっちり行つたのは、彼なりの理由があつた。入金、購入、支払関係の書類を念入りに整え、銀行残や金庫内の現金の和が書類と正確に合致しておく必要があつた。これによつて勤め先の金銭拐帯や横領の疑いが生まれないようにしたのである。それを済ましてから、どこかへ漂流して行く先を考えようとしていた。

十二月三十日の夜、よしこを犯そうとしたのち、自分にかかってくるかも知れない、司法の追及があつたにしても樂觀的な態度でいた。それは強姦罪が親告罪であるので、よしこは恥ずかしさがあつて警察には届けられないだろうと読んでいた。たとえ告発されても証拠となるような身体への傷害を与えていないこと、さらに強姦にまでは到らずに、暴力行為で終わつたからだ。暴力行為を証明するには、打撃などによる傷が身体のどこにもないのはつきりしていた。用務員の年寄り夫婦が建物の片隅に眠つていただけだった、広い構造物の中での深夜のことだったから、目撃者や悲鳴を聞いた者がいない状況だったなどから、彼女が告訴することは万あるまいと考えていた。

よしこは自分が犯された女になつたという思い込みが誤つたものであるのかどうか分からなかつただろう。彼女の純情さでは誰かが教えない限り確かな判断は出来ないはずだった。それをつきりするには病院に行き診察を受ければ即刻解決がつくのは分かっていたが、二十一歳の彼女にはとてもその行動ができなかつた。自分の身体について曖昧に考える日々が、ある機会が生まれるまでつづくことになつた。そのために絶望的な悲痛感を味わつたところの一夜を、消せるものなら消し去りたい願望を持つた。あの夜の忌まわしい記憶を外在化して心を楽にしたかつた。彼女は不幸なインシデントの渦中で、暴力の下に開かれた身体が残つたのだと思ひこみ、彼女のこれからの人生に付きまとう、苦く悲しい体験が生まれていた。

よしこは年明け四日の午後、一度だけ院長室に顔を見せたが、重富がいるはずの事務室には寄らなかつたから私物はそのままにしてあつた。暗い表情のまま誰とも話さず、友人の幸子にも目を合わすのを避けるような態度で内緒ごとを話すように小さい声で家庭の事情により退職するのだと簡単に話して、退職届はあとで送るからと言つた。そして笑顔のないまま医院の人

たちとは離れていった。この際異常に元気がなく失意の態度に終始したので周囲の人は何事が彼女に起こったのか詮索しなかったが、よしこの表情と態度は気軽に尋ねられる雰囲気ではなかった。十二月三十日の始終は重富の精神には小さな行為だったが、大きい現実を伴う結果になったというべき事件だったのだ。

十二月三十日夜中に何事かが起こりはしないかと心配した青年が医院の外壁回りまで来ていた。その青年は一年前に医院に就職して事務係になり重富の部下になった帖佐だった。

つづく